

コンチネンタル・ドリフト

# ラッセル・バンクスの『大陸漂流』にみる 1980年代アメリカの地殻変動

藤 野 功 一

ラッセル・バンクスの1980年代の代表作『大陸漂流』(1985)では、アメリカ北部にあるニューハンプシャーからアメリカ南端のフロリダへと、経済的な成功を求めて下ってゆく白人男性ボブを主人公とする章と、貧困から脱出するためにアメリカを目指し、フロリダへと密航しようとするハイチ出身の娘ヴァニス<sup>コンチネンタル・ドリフト</sup>を主人公とする章が交互に語られ、そして最後にこの二つの物語が悲劇的に交差するように仕組まれている。労働者階級の白人主人公の息遣いや生活のリズムまで感じ取れるような文章で描き出される物語に、80年代アメリカの政治的問題のひとつであったハイチ難民の物語が挿入されることで、アメリカの現代社会に対する別の視点を与えられるこの小説で、バンクスはアメリカの現状への批判を作品全体の構成によって暗示しながら、アメリカの現代に生きる白人男性の心理をこまやかな筆致で描き出すことに成功している。

それでは、はたしてバンクスは1980年代のどのような社会的動向をこの小説の中で暗示しているのだろうか。この小説の主人公ボブには、身の回りのせせこましい現実しか見えていない。また、ハイチを脱出しようとする難民のヴァニスも、全く見通しの立たないなかで、出口の見えない苦闘を余儀なくされる。この状況の中、主人公たちは得体の知れない不安といらだちの中で生きてゆく以外にない。バンクスの文章は常に具体的な出来事に沿って物事を描いてゆくので、その文章は歴史全体の大きな見通しを論じたり、現代社会の非人間的な構造を口を極めて批判したりはしないが、そのかわりに、小説全体を知的に構成し、彼自身の世界観をその小説の構成によって浮き上がらせようとしている。そして小説全体を読む読者は、ここで描かれる得体の知れない鬱屈した状況の

正体は何だろうかということを考えざるを得ないだろう。

このうすぼんやりした先行きへの不安と圧迫感は、おそらく1980年代を境に顕著に私たちの世界に訪れたと言っていいのだろうが、その変化をバンクスの作品はその文体と構成に反映させている。そして、すでに80年代を一つの歴史的な過去として振り返ることができ、80年代を現在の状況と結びつけることのできるわたしたちは、このバンクスの小説が示す状況がどのようなものかということに、もう少し明確な答えを出すことができるかもしれない。ここでは、バンクスの『大陸漂流』<sup>コンチネンタル・ドリフト</sup>が、80年代に始まって現在まで続くアメリカの社会的な地殻変動をどのように暗示しているかを論じることとしたい。

## 1.1980年代、あるいは見通しの悪い時代

歴史上のおおきな枠組みで言えば、1980年代は、第二次世界大戦後の世界を大きく分断していた資本主義国家アメリカと、共産主義国家ソ連との冷戦状態が徐々に終焉へと向かっていた時代である。この道のりは、実質上、アメリカ資本主義の勝利への過程だったといえるだろうが、だからといって世界全体がこのころ、すみやかにアメリカとそれが体現する価値観を受け入れはじめたというわけではない。むしろ、この時代は資本主義と共産主義の対立という大きな視野に立った世界観が瓦解してゆき、かえって多くの人々がお互いに共有できるような視点をうちたてることができなくなっていった時代であった。社会と世界がこれからどう変化するのか、全く見通しが見つからない。そういう感覚を人々が共有しはじめた時代である。そして逆に言えば、この社会全体の見通しの悪さ自体が、80年代からはじまる社会変動のもっとも大きな特徴といってもいいだろう。

この社会全体の複雑さを増す構造的変化は、1970年代末にすでに予言されていたものでもあった。ジャン・フランソワ・リオタールは『ポストモダニズムの状況』(1979)のなかで、70年代末の状況を概括して次のように述べている。すなわち、重工業を中心とした近代国家の基礎づけを終え、高度な情報化社会へと足を踏み入れたいわゆる「ポストモダン」と呼ばれる状況においては、コンピューター・ネットワークの発達に伴う国際的な情報の流動化が起り、そ

れにともなって、それまで世界的な情勢にたいして意志決定の権限を持っているとされた古い枠組み、すなわち国家、政党、公共機構などがそれまでの権威を失ってゆく。ソ連とアメリカを含む西洋社会の人々の多くが信じ、みずから世界の中に正しく位置づけることを可能にしていた、人間の啓蒙と隷属状態からの解放、あるいは公共の福祉の実現と人道主義的な他国への支援を目指す「大きな物語」(37)が、そのおおもとである国家の権威の喪失とともにその説得力を失い、人々はお互いを大きな見取り図の中で有機的に結びつけてくれるはずの社会的に共通するモラルや価値体系をもたなくなる。そのかわりに強調されるのは、今まで以上に複雑で多様に変化する関係性の中で流動し、自分を取り巻く局地的な事柄とのつながりのなかのみで存在する「個人 (self)」(15)という存在のほうだろう。リオタールが70年代末に予言したのは、現在にもあてはまりそうなこの新たな「個人」の出現についてであった。このような個人が小説の中に描かれると、それは、歴史的な大きなうねりのなかで自己実現のために格闘する英雄的な存在とはならず、むしろ目の前の解決すべき問題に汲々と追われ、決して偉大な世界の意味や価値といったものに結びつくことなく、利益や利用価値のみを判断基準とする状況の中でささいなことに一喜一憂する人間として現れることになるだろう。

1980年代の個人を取り巻く状況を、リオタールが理論的に説明してくれているとすれば、バンクスが85年に出版した小説『大陸漂流』<sup>コンチネンタル・ドリフト</sup>は、このポストモダンの状況に生きる人々の具体的な肖像の提示である。ごく些細な問題にかかざらって、いっこうに全体を見渡すことのできない状況を生きる人々を描くに際して、バンクスの、こまかな日常の描写に冴えをみせる文章は、実に有効に働く。ことにバンクス自身が、アメリカの労働者階級出身であるため、労働者階級出身の白人男性の心理を描く場面では、彼の心理描写の巧みさがよく発揮されている。

この小説の後半における白人男性の主人公、白人男性のロバート・デュボイス（通称ボブ）が陥る状況は、1980年代初頭のいわゆるポストモダンの社会を生きる労働者階級の男性の孤独と不安をよく描き出しているだろう。故郷の職を捨て、自分の兄からも離れて、親友のエイヴリーのもとへと人生の転機をは

かって会いに行った主人公が、夜遅く帰ってから妻の眠るベッドに潜り込もうとする。すると、フロリダの酒屋のオーナーとして成功しているはずの兄から、一本の電話がボブのもとにかかってきたことを妻から告げられる。それはボブの兄が経営者として資金繰りがうまくいかなくなり、破滅の縁に立たされている状況の中で弟のボブに金の無心をするためにかけてきた不吉な電話なのだが、留守だったボブはまだそれを知らない。妻のエレインはもともと、夫の兄のことが嫌いだったので、妻は夫に、夫の兄から電話があったことだけを簡単に伝えて、「何も言わずに、でこぼこしたベッドのなかでもっと居心地がよくなるように、彼女のどっしりした腰を持ち上げて寝直すだけ」だ(284)。ボブがその電話の内容がどんなものだったのか、何度聞いても、妻は答えない。仕方なく、「ボブは深いため息をついて、ベッドから起き上がると電話があるカウンターのところへ行った。暗闇の中で壁のほうに手を伸ばして、部屋の明かりをつけると電話の下からメモ用紙を引き出してそのメモを読んだ。『電話、エディから。帰ってきたらすぐ連絡くれとのこと、至急。』その細かい文字で走り書きした筆跡を読みながら、ボブは、妻の自分に対するいきどおりと無関心を、まるでエレインがそのメモを大声で読んででもいるかのように、聞き取ることができた」(284)。

この日常の些細な描写は、この小説の全体の構成のなかでは、ボブの兄の決定的な破産の告白とボブ自身の経済的な貧窮の実感へとつながるきっかけとなる場面であり、そしてまた、ボブとエレインとの夫婦関係にすでに深い亀裂が走っていることを暗示する場面でもある。しかしながら、ボブの妻は自分の置かれた状況の中に潜んでいる不吉な予兆を感じ取っているかもしれないにしても、それを直視することはなく、あたかも「でこぼこしたベッドのなかでもっと居心地がよくなるように」寝直すのと同じように、目の前の不快な状況がどのようなものかを解明しようともせず、一時の安寧を得ることによってその問題をやり過ごそうとしてしまう。ボブもまた自分のフラストレーションの根本にある問題を解決しようとはせずに、一時的な破壊衝動に逃避する。彼は妻に直接暴力を振るうことはないが、逆上すると見境なくものに当たり、車の窓を割り、家の中を滅茶苦茶にしてしまうことさえあるが、それらの行動も、彼が自

分の抱える問題をごまかすために行っているために、彼の生活に何らかの解決をもたらすということはない。妻と子供たちは一見するとボブを尊敬し、彼の意見を尊重してくれているようだが、実際のところはいつも彼の暴力的な行動におびえていることがその行動の端々から暗示される。一見ごく普通の労働者階級の家庭の中で、夫は経済的に追い詰められ、そして妻と子供たちはその夫の暴力的な威圧に追い詰められている。いつもは穏やかな表情の裏に隠されている妻のボブに対するいきどおりと無関心がここでごく些細なメモをきっかけに表面化するが、それは実際には深い溝となつてすでにボブと妻との間に横たわっているものがたまたまあらわれただけだ。ボブは、妻を愛していると自分では信じながら、常に妻以外の複数の女性と肉体関係を持っており、また、エレインも、ボブの親友のエイヴリーと不倫関係にあったことが明らかになる。

この電話以降、こまかな出来事はつぎつぎと思わぬほど大きな不幸の連鎖へとつらなつてゆく。兄は資金繰りに行き詰まって自殺し、頼りにしていた親友のエイヴリーは借金まみれの麻薬密売人であることがわかる。そしてボブは、自分の知る労働者階級の男たちはみな、だれもが、それぞれの孤独の中で袋小路に入っているのだということをごまかすと意識する。どうあろうと、「自分はきっと今のような夜の中にいることになつただろう、自分の人生は役立たずで、価値がなくて、失敗した計画との挫折した野望と空虚な夢のごたませでしかない。自分は結局なにも頼るものもなくなつてしまうのだ」(314)と彼は考える。そして心理的にも経済的にも追い詰められたボブは、エイヴリーから、ヴァニス・ドリンズヴィルを含む16人のハイチ難民の密航を手伝う計画を持ちかけられ、結局は自分を破滅させることとなるこの違法な仕事に手を貸すことになる。そして彼はヴァニスをのぞく15人ものハイチ難民を海で溺死させ、そしてその報いを受けるかのように、フロリダのハイチ出身の若者たちによって殺される運命をたどる。

ここで描かれているのは、一人の労働者階級出身の男の転落から死へ至る人生である。もともとニューハンプシャー北部に住んでいた主人公のボブは、決して多くはないが安定した収入のある石油バーナーの修理工という立場を捨て、兄と同じように経営者として成功する夢を抱いて、フロリダへ旅立つ。この希

望へ旅立ちとは、しかし、結局は、ボブ自身がそれまで目にすることもなかったアメリカの現実へ直面させ、彼にハイチ難民と出会わせ、そしてその出会いは彼自身を破滅へと導いてゆく。ボブにとって、これらの出来事はすべて偶然のように連鎖してゆく出来事であるかのようにみえるが、この小説全体の構成は、それを単なる偶然としてとらえることを読者に許さない。むしろ、このアメリカという国の内側で先の読めない状況を生きるボブの物語を分断し、その一見偶然のように見える一連の出来事を、もう一度べつのかたちで現代のアメリカに住むすべての人々の置かれた状況とむすびあわせることを読者に強要するかのよう、ハイチ難民の年若い女性、ヴァニスのフロリダへの渡航の物語がさしはさまれてゆく。それでは、このボブの物語と、ヴァニスのもう一つの物語との関係は、小説の中にどのような歴史的状況を伝えようとしているのか。1980年代のハイチを巡る状況をふまえると、この小説全体はどう読み取れるだろうか。

## 2. ハイチ、あるいは小さなアメリカの鏡

チャールズ・アーサーとマイケル・ダッシュの編纂した『ハイチ・アンソロジー』を参考にしながら、この小説の背景をなしている政治状況をまとめれば、次のようになるだろう。ハイチでは、1957年から86年にかけて、フランシス・デュバリエとジャン・クロード・デュバリエの親子二代にわたる大統領の独裁政治が続いたが、その圧政と貧困から逃れるための難民、いわゆる「ボートピープル」がアメリカに渡り始めた。1972年に、ハイチからの難民を乗せたボートがフロリダに行き着き、海上をボートで渡るルートが現実のものとなると、ジャン・クロード・デュバリエ大統領のもと、貧困と圧政に拍車がかかった70年代に、5万から8万人のハイチ難民が違法にフロリダに渡っている。1981年には毎月約千人のハイチ難民がフロリダにたどり着くようになったため、アメリカはデュバリエ政権と協定をむすび、アメリカの沿岸警備隊がハイチの船舶を停止させ、密航者たちをハイチに送り返すことができるようにした。アメリカにたどり着いたハイチ難民が主張したデュバリエ政権の人権侵害の実例にもかかわらず、アメリカ政府は彼らを政治的難民よりはむしろ経済的な理由による難

民と考え、難民保護施設の対象とはしなかった。湾岸警備隊にフロリダ行きを阻まれた多くの難民は、ハイチから最も近いタークス・カイコス諸島やバハマ諸島、あるいはジャマイカやキューバに流れ着いた(180-81)。アメリカは80年代にはいり、ハイチ難民が救いを求めてさしのべる手をあからさまに振り払い始めたのである。

このアメリカのハイチ難民に対する態度の変化は、1980年代におけるアメリカの対外政策の大きな変化を直接反映したものであった。イポリト・ピエールの『ハイチ、消え去らぬ火山灰から燃え上がる炎』によれば、70年代後半、ジミー・カーター大統領は世界中に自分の人権尊重の考えを宣伝しようと、デュバリエ大統領を説得して、その政策を人民に開かれたものにしようとしたのだが、しかし80年にロナルド・レーガンがアメリカの大統領に選出されると、むしろアメリカの目的はカリブ諸国の中でもハイチをさらに近代化された工業国に転換させるということに絞られ、人権問題は重視されなくなり、デュバリエ大統領は政治的な弾圧を再び開始できるようになった。レーガンが選出されたその同じ月である80年11月に、デュバリエはうろさく政権を批判するラジオ番組を閉鎖させ、自分の政策に反対する者たちを軒並み逮捕し、ハイチをふたたび完全に政治的に混乱した状態へと引き戻してしまった(112)。80年代初頭から急増したポートピープルは、実際にはハイチが小さな鏡のようにアメリカの政策の変化を直接反映した結果であるのだが、一方でレーガン政権のもと、ハイチの人権問題を重視しなくなったアメリカは、みずからの政策の変化の結果であるハイチ難民を救うことを拒否し始めたのである。

バンクスの小説は、このハイチを巡る政治状況をふまえて描かれているが、直接これらの政治的背景に言及することはなく、むしろ1980年代初頭の状況で、このような状況の中でハイチ難民がどのように生きなければならなかったかを具体的に描こうとしている。

ここでヴァニスの物語の筋書きをごく簡単にまとめておこう。年若いハイチ女性のヴァニスは、幼い子供を抱えながらも、甥のクラウドがたまたまハイチの上層部が食べる高価なハムを盗んだことから、幼子と甥とともにハイチを脱出し、有り金をはたいて密航船に乗る。ヴァニスは密航船が直接フロリダに着

くものと信じていたが、だが彼らは、他の多くの難民と同じように、フロリダから遠く離れたタークス・カイコス諸島のうちの島の一つ、北カイコス島へ連れて行かれるだけに終わる。ヴァニスは、再び自らの肉体を代償にしてそこを脱出し、ジャマイカへと渡るしかない。彼らは狭く暗い船倉に閉じこめられ、彼らを渡らせる男たちは当然のようにヴァニスを自分たちの性欲の餌食とする。あまりの極限状態に、ヴァニスは自分に起っていることが現実かどうかさえ区別がつかない。そして、「夢のように、しかし夢ではなく」(200)、やせた、茶色の肌をした男と長い茶色の髪の毛をした白人の男と一緒に船倉にやってきて、白人の男は身振り手振りでクラウドと赤ん坊を船尾のほうへ追いやるとヴァニスのほうを電灯で照らしだし、そのあいだにもう一方の男がヴァニスをレイプする。男たちは順番にその暗い船倉の中で彼女をレイプし、それが終わると再び彼女らを真っ暗な船倉におしこめられたまま、ジャマイカへと向かう。その航海の間ずっと、ずっと男たちはヴァニスに対して性的な暴力をふるい続ける。暗い船倉に閉じこめられたためにヴァニスらは徐々に時間の感覚を失い、甥のクラウドにとっても、時折男たちがヴァニスを訪れるのは単に「いくつも見る夢の中の一つの断層」であるかのように思うようになる。そして彼らが去った後は、ふたたび「無窮に続く暗闇の甘い永遠の夢」のなかに戻るような感覚に陥る(201)。

ヴァニスとクラウドは、間断なく肉体的な暴力をふるわれ、非人間的な状況の中で徐々に通常の間人らしい感覚を失い、彼ら自身、生き残って目的を達成するためには手段を選ばない精神状態に陥る。そして、自分を守るためにあらゆる現実にたいして無感覚となった彼らがとる手段は、極端なものとなる。たどりついたジャマイカにおいても、ヴァニスはやはり売春婦として中国人のグラボウに養われることになるのだが、このグラボウから逃れるため、そしてまたフロリダに渡る密航船に必要な大金を手に入れるため、甥のクラウドは手に入れたナタでグラボウを殺すことを決意する。そしてクラウドはグラボウとの目が合った瞬間に、ナタを振り下ろし、「果物のように彼をちょうど真ん中から真っ二つに」切ってしまう(227)。

クラウドはもはやグラボウを殺すことに何のためらいも感じない。彼はただ